

ふるさとひょうご

東京兵庫県人会会報

平成7年8月

63号



神戸ビーフ

あでやかな鹿の子模様、とろけるような風味と甘味で世界的にも有名な神戸ビーフ。

県内で生産された但馬牛をもと牛とする神戸ビーフは、筋繊維の奥にまでサシとよばれる脂肪が細かく入り込む“肉の芸術品”。

料理法はさまざまで、鉄板焼き、炭焼き、網焼き、あるいはしゃぶしゃぶと、同じ肉でも変幻自在。

この秋、復興の進む神戸を訪れ、特上の霜降りを堪能されてはいかが。

てい談「われら同窓生」

小野高校

好き勝手したよき時代 魚住 董さん
 たたき込まれた基礎力 藤平 善信さん
 盛んだったクラブ活動 小林 裕幸さん



魚住 董さん

昭和8年、仙台市生まれ。昭和26年に小野高校を卒業。京都大学工学部修士課程電気工学専攻修了後、昭和32年に富士通信機製造（現・富士通）へ入社。昭和63年より、国立沼津工業高等専門学校の教授に。現住所は、神奈川県横浜市中区山元町5-210



藤平善信さん

昭和27年、神戸市生まれ。昭和45年に小野高校を卒業。昭和51年東京大学文学部仏文学科を卒業後、大鵬薬品工業に入社。開発部、経営企画部などを経て現在、人事部課長。

現住所は、千葉県佐倉市上座567-11



小林裕幸さん

昭和37年、小野市生まれ。昭和56年に小野高校を卒業後、早稲田大学へ。卒業後、リクルートに入社。現在は生活情報誌事業部に所属。八王子をエリアとする生活情報誌編集部のチーフを務める。

現住所は千葉県印旛郡印西町原山2-3-4-501

—今回は、兵庫県立小野高校の同窓生の皆さんが集まっていたきました。明治三十五年に創設された兵庫県立小野中学校は、戦後の学制改革で小野高校と名称を改め、今年で創立九十三周年を迎える東播地区の名門校です。今日は、小野高校の同窓会である蜻蛉会東京支部のメンバーでもある三人に、学生時代の思い出などを語っていただきたいと思っています。まずは、支部の副会長を務める魚住さんから。

魚住 私は昭和二十年に入學して二十六年に卒業しました。入る時は旧制中学でしたが、

—魚住さんとは約二十年の差がある藤平さんですが、その辺りはどうでしたか。

藤平 私のころも、先生方はとても真面目でした。英語にしても古文にしても、文法の基本的なところを徹底的にたたき込まれるんです。今でも古文の助動詞の活用がすらすら出てくるくらいです。とにかく基本をしつこく教え込まれましたね。

小林 基本を教え込まれたというのは私のときも同じです。私が入學するころは共通一次試験が始まった時期で、先生に「現役で国公立大学に入れ」ということをかなり言われました。私立を受けようものなら「なんでおまえは国公立にいかないんだ」という調子で、共通一次を受けて点数がだいたいわかると、「この大学へ行け」と指導されるんです。浪人することさえも許されないような雰囲気でした。だから一発勝負なんて絶対許されませんでした。それならば基礎ばかりでなく、いわゆる受験勉強に力を入れてもいいはずなのにそうではなかったんですね。

魚住 まだ私がいた当時は、みんなが成績を気にする風ではなかったですね。クラスは一つは理数系、一つは文系、一つは就職の三つに別れていたように思います。

出る時は新制高校だったわけですね。昭和二十二年に新学制の実施にともなって併設中がつけられ、我々の学年は併中卒の一回生と呼ばれました。入學した時はまだ戦時中でしたから授業には軍事教練があり、学校には兵隊さんが駐屯していました。戦争が終わると、それまで使っていた教科書が使われなくなり、ガリ版で刷った教科書を手渡されて生徒が自ら閉じて製本したのを覚えています。勉強は非常に難しかった。とくに数学はレベルの高い微分などを教わった記憶がありますね。生徒の質も高かったのではないですか。

藤平 四学級のうち三学級が進学クラスになっていましたね。そのうちの一つが理数系のクラスだった。ただ、理数系は五十人以上いて教室が狭かったですね。模擬試験があると優秀な人は廊下に張り出されました。それでもみんな地元志向が非常に強くて、ずば抜けて優秀な生徒でも京都や大阪など関西の大学までしか行かなかったように思います。

小林 私のときは五クラスのうち三クラスが文系、二クラスが理数で、全部が進学クラスでした。一〇〇%近くの生徒が進学していましたね。我々のころになると東京の大学へ進学する生徒が多かったです。私は小野の生まれですが、小野に生まれると小野高校に行かなければいけないという意識を小さいころから植え込まれました。西脇や三木からも生徒が来ており、地元の小野の生徒は少ななかった。東条町などから自転車で二時間かけてくる人がざらにいました。それだけ難しくなっていたんでしょうね。田舎ながらエリート意識というのはいまも持っていたようですね。

魚住 確かに小野高校には非常に広い範囲から生徒がきていましたね。西脇から加古川、三木、吉川とかからも来ていましたね。戦後に新制高校があちこちにできて三木にもでき

ただだけれど、やっぱり小野がよくて通ってきた生徒が多かったですね。私も三木が実家なんですが、最初の三年間は自転車です。四十分かかった。途中で峠を越えなければならぬんです。やっと四年目にバスが通じるようになったんです。

藤平 私三木から通っていたんですが、神戸電鉄が通るようになってだいぶ便利になりました。

魚住 あとで電車が通るようになったことを知った時、ちくしょうと思いましたよ。

——みなさん勉強にはだいぶ熱心だったようですね。

魚住 そんなこともないですよ。校舎の一角には遠くから通う生徒のための寄宿舎があったんですが、毎晩酒盛りをやっていました。だれか先生が必ず宿直で泊まるんですが、生徒と一緒に寝てしまったことがありました。

藤平 私の時代は大学紛争が盛んになりました。小野高は非常に静かでした。よそのことには関心



て三年生の時には部長を務めました。高校野球の応援にも行きましたが、兵庫県の場合は予選で甲子園に行けるわけで、アルプスタンドで演奏していました。ただ、野球部はあまり強くなっていた一回戦で負けてしまったけれどもね。

小林 わたしのころは部活動が非常に盛んで、陸上部は日本一になりました。空手も全国大会へ行ってましたし、E.S.Sも全国に出ていましたね。私が通っているころはちょうど校舎が新しく建て替えられる時で、プレハブで勉強したんですが、環境が悪かったせいか進学率が落ちたんですね。そういう意味では生徒がスポーツや趣味に打ち込んだのかもしれないですね。

魚住 環境が悪くなると学生はひねくれるんですよ。私がいま勤めている学校でも生徒の成績が落ちたことがかつてありました。やっぱり校舎の改築時でしたね。環境は整えてやらないといけないんです。

——なにか名物行事はありましたか

藤平 行事といえば文化祭、体育祭とありました。そのときの世相に合わせた絵を立て看板に描きましたね。

小野 体育祭では仮装行列もありました。

運動部対抗リレーもあった。そのスポーツの格好をして走るリレーで、胴着の重い剣道部がいつもびりでした。

——小野高校で学んだことは

藤平 「明（めい）・浄（じょう）・直（ちよく）」という言葉はよく校長先生が言われました。字の如く、明るく、清く、真っ直ぐに生きよ、ということなんですが、それが生徒に浸透しているかは人によるでしょう。初めにも言いましたように、小野高校で培ったものがあるとすれば、やっぱり基礎を教えた、それだということでしょうね。

——小野の街は変わりましたか

小野 全然変わっていません。三木や加西は工業団地がどんどんできています。けれども、本当に発展しない。今も小野に実家があるの里帰りするんですが、いつ帰っても同じ風景なんです。逆にほととずる部分もあるんですが。

魚住 三木は神戸に、加西は姫路に近いのに比べ、小野は交通の面で大都市にアクセスしにくいという点はあるのかもしれないね。

小野 小野には産業がないんです。だから発展を遂げる地域との格差が広がっている。地元の人達も小野に生まれて小野高校を出た

が無かった。やっぱり田舎だったせいでしょうか。ですから、大学で東京に出たときにはカルチャーショックを受けたね。皆けっこう遊んでいるんだなあ、と。

小野 私もうそでした。東京に出た当初は部会の学生がずいぶんかつこ良く見えましたが、でもよくよく付き合ってみると大したことないなという気はしましたね。大学時代も小野高の友人と東京でよく集まったんですけど、本気でやれば東京の人間には負けないぞということを感じていました。

——クラブ活動はどうでしたか。

魚住 それは楽しかったですね。私は野球やテニスやバレーなどいろいろなクラブを渡り歩いて好きなことをやっていました。あのころは出入り入りが自由だったんですね。私のころに放送部というのを作りました。部員は十人くらいだったんですが、先生に内緒で校内の自慢大会というのをやりました。音楽室を借りて音楽部員が演奏しました。生演奏とレコードでやったんです。さすがに翌日は先生に怒られましたけれどもね。好き勝手なことをやらせてくれるという余裕がありました。

藤平 私はプラスバンドをやっております

人がたくさんいますが、小野を出て東京に出てきている人が多いですね。ただ、発展してほしいという一方で高校の周りはあのままの落ち着いた雰囲気であって欲しいというのはあります。高校の裏に坂がありまして、転び坂というんですけれども。あれは一番僕らの世代では一番印象深いものがあります。デパート取ともいうんですけれど。彼女がきくと、転び坂と一緒に降りて行くというのは記憶に残っていますね。駅に行くには正門からのほうが近いのだけれども、転び坂を下って遠回りして帰る。少しでも長くいたいというわけですね。あの坂はいつまでも残ってほしいです。

魚住 転びの丘ともいいたよ。女の子の話でいうと、我々の時代は昭和二十三年に町立の小野高女を前身とする柳桜高と統合されて共学となったわけです。ちょっとうれいような困ったような複雑な心境でしたね。でもクラスは別で女の子のクラスは二つあって、男のクラスが四つあったと思います。

——小野高の出身者で著名な方はいますか

魚住 あまり思いもつきませんね。傑出した人はいないけれど、堅実にやっている人が多いという印象ですね。